

In the Beginning Was the Word

はじめにことばがあった

John ヨハネ1:1~3 September 21, 2008

2008年9月21日

John 1:1~3

In the beginning was the Word, and the Word was with God, and the Word was God. 2 He was in the beginning with God. 3 All things were made through him, and without him was not any thing made that was made.

ヨハネ1:1~3 初めにことばがあり、そのことばは神とともにありました。そしてそのことばは神でした。この方は神とともにはじめからおられました。すべてのものはこの方を通して創造され、この方なしに造られたものは何一つありませんでした。

ヨハネの福音書はイエス・キリストおよび彼の人類救世を物語っています。この福音書はイエスの地上での最後の過去3年間、特に彼の死とよみがえりに注意を注いでいます。この福音書の目的はヨハネ20:30~31を読めば明らかです。「イエスは弟子たちの前で、この本書には書かれていないその他多くの奇跡を行いました。しかし、これらが書かれたのは、あなたがイエスがキリスト、すなわち神の子、であると信じ、そして信じることにより彼の名にいのちを見出すためです。」この福音書が書かれたのは人々がキリストを信じ、かつ永遠のいのちを持てるようになるためです。

信者と未信者のために書かれた

「人々がキリストを信じるため」と書いてあるからといって、この本書が未信者のためだけにあると思わないでください。イエスを今信じている人たちも、最終的に救われるためには、イエスを信じ続けなければならないのです。ヨハネ15:6でイエスは言いました。「誰でもわたしにとどまらない者は枝のように捨てられ枯れます。そして枝はかき集められ、火の中に投げられ燃えてしまいます。」ヨハネの8:31では「もしあなたがわたしのことばにとどまるなら、まことにあなたはわたしの弟子です。」とイエスは言われました。

つまり、ヨハネが「これらが書かれたのは、あなたがイエスがキリスト、すなわち神の子、であると信じ、そして信じることにより彼の名にいのちを見出すためです。」と書いたのは、未信者の信仰心を覚まさせ、信者の信仰を保たせるためなのです。あなたが、他の何に比べてもキリストを宝とし、信頼し続けるのを助けるにあたり、聖書の中にヨハネの福音書以上に適した手紙はありません。

目撃者による証言

今日の箇所のイエスの描写は、数ある非常に重要な出来事を目撃者により書かれています。この福音書には5回にわたり「イエスの愛された弟子」という不思議な表現が出ています。(13:23、

19：26、20：2、21：7、21：20) 例えばこの福音書の最後のほうにあたる21：20には「ペテロは振り返り、イエスが愛された弟子があとをついて来ているのを見た。」と書いてあります。続いて、4節後の24節には「これは、これらの出来事を目撃し、これらのことを書き留めた弟子です。」と書かれています。つまり、ここで「イエスが愛した弟子」と呼ばれている者、最後の晩餐でイエスの肩によりかかっていた者が、神の靈感を受け、イエスの生涯で起きた出来事と、それがいまの私たちにとってどんな意味があるかを知らせるためにこの福音書を書いたのです。

神の靈感を受ける

ここで私が、この福音書の著者は神の靈感を受けたと言える理由のひとつは、イエス自身がそれを約束したからです。イエスはヨハネ14：26で「父がわたしの名により送る助け主、すなわち聖霊が、あなたがたにすべてを教え、わたしがあなたに語ったことをことごとく思い起こさせます。」と言いました。また16：13では「真実の霊が来たら、その霊はあなたを全すべての真実に導きます。なぜなら、そのお方は自分の権威によって話すのではなく、すべて聞いたことを話すからです。」

つまり、イエスは、自分の使徒を自分の代理として選び、お救いになられ、彼らを教え、派遣し、そして聖霊を通して、後に教会の土台となるように、書きとめられた神のことばとして神性な助言を与えたのです。(エペソ2：20) それにより、私たちはヨハネの福音書が神の靈感を受けたことばであると信じるのです。

ヨハネの福音書の文頭の3節

「神のことば」という表現はヨハネの文頭に私たちを導きます。「初めにことばがあり、そのことばは神とともにありました。そしてそのことばは神でした。このお方は神とともに始めからおられました。すべてのものはこのお方を通して創造され、このお方なしに造られたものは何一つありませんでした。」今日はこれらの箇所を要点を置きます。

「ことば」であるイエス

まず初めに、この「ことば」という単語に注目をあてましょう。「初めにことばがありました。この「ことば」に関し、私たちが知るべきである最も重要なことは14節に書かれています。「そしてそのことばは肉体をとられ、私たちの間に住まわれた。真実とめぐみに満ちあふれた、父なる神の唯一の子であるという栄光を私たちは見た。「ことば」はイエス・キリストを指しています。」

ヨハネは21章をかけて何を書くか、知っていました。彼は、イエス・キリストが何をなされ、教えられたかを私たちに語ろうとしているのです。これは、人としてのイエス・キリスト、ヨハネが目で見、聞いて、自分の手でふれた(第一ヨハネ1：1)、ヨハネが知っていた人イエス・キリスト、の業績と生涯について書いた本書です。血が流れている、生身のイエス・キリストです。幽霊でも、現れたり消えたりする幻でもありませんでした。イエスは食べ、飲み、疲れを覚

えるときもありました。ヨハネは大変緊密に彼のことを知っていたのです。イエスの母は晩年をヨハネとともに過ごしました。(ヨハネ19：26)

したがって、ヨハネ1：1～3でヨハネがしようとしていることは、イエスに関してもっとも重要な事柄を、できるかぎり、私たちに伝えることなのです。イエスが一体誰なのかということをもヨハネが十分理解するのに3年以上かかりました。しかしヨハネは、彼に3年かかったことを読者が理解するのに、3節以上かけたくなかったのです。ヨハネは福音書の文頭から、私たち読者の頭に、明確に確固とした、イエス・キリストの創造主としての権威力と神威と永劫の威厳を植えつけたかったのです。

無限の威厳を持つイエス

それが1節から3節の要点です。ヨハネは私たちにこの福音書を、尊敬心と謙虚さと従順さを抱いて読ませたいのです。カナの結婚式で水をぶどう酒に変えた人が、井戸でサマリアの女と会話をした人が、山上で群衆に説教した人が、この宇宙の創造者であるということに畏敬の念に打たれるようにと。みなさん、理解できますか？これを感じるができますか？これは私が計画していることではないのです。これは私の説教の構成ではなく、この福音書の構成なのです。神がヨハネにこのようにさせようとして、ヨハネが書いたのです。あなたや私なら、読者に「一体この人は誰なのだろう？」と考えさせるように、少しずつイエスの正体を明かすように書くかもしれません。

でもヨハネはそうではありませんでした。「私のペン先が初めに書く文から、私は読者をこの人（イエス）の正体、肉体をとられ、私たちの間に住まわれたという事実、により圧倒させ茫然とさせるでしょう。決して、誤解がないために。」神とともにあり、神であり、私たちのために自分のいのちを捨てられた(ヨハネ15：13) イエス・キリストが、この全世界を造られたという、明確で確実に驚異的な事実を読者である私たちが理解したうえで、この福音書の全てのことを読ませたい、とヨハネは思っているのです。ヨハネは、あなたに壮大な救世主を知り、信じてもらいたいのです。あなたがイエスに関して楽しむであろう何にもまして、ヨハネはあなたに無限の威厳を持つイエスを知り、宝としてもらいたいのです。

なぜ「ことば」なのか？

しかし、それでも私たちは、なぜヨハネはイエスを『ことば』と呼ぶことにしたのか、尋ねるべきです。はじめに『ことば』があった。

それに関する私の答えはこうです。ヨハネがイエスを『ことば』と呼んだのは、イエスの口からでることばは神の真実であり、イエスのひとがらも神の真実であり、この二つの融合のしかたは、イエス・キリスト自身こそ(誕生、ミニストリー、教え、死にかた、よみがえりにいたるまで)最終的で決定的な神のことば(メッセージ)であるということに気がついたからだと思います。言い方を変えれば、神が私たちに言わなければならなかったのは、ただ単にイエスがその口を用いて言われたことだけではなく、彼がどんな人物であったか、そして彼が何をしたかということ

からも読み取れるということです。イエス自身のことばからも彼がどんな人物であったのか、ということと彼の業績が明確にあらわされています。ですが、イエスそのものと彼の業績こそが、神が示そうとしている主要な真実なのです。「わたしはまことです」とイエスはヨハネ14:6で言いました。

イエスは真実を証言するために来ました（ヨハネ18：37）そしてイエスこそが真実だったので（ヨハネ14：6）。彼の証言とかれのひとがらは真実の「ことば」でした。彼は言いました。「もしあなたがわたしのことばにとどまるなら、まことにあなたはわたしの弟子です。（ヨハネ8：31）」また「わたしにとどまりなさい。（ヨハネ15：7）」とも言いました。私たちが彼にとどまるなら、わたしたちは『ことば』にとどまっているのです。イエスは彼の行いは彼についての証言だと言いました。（ヨハネ5：36、10：25）つまりは、彼は行いにあつて『ことば』だったので。

イエス：神の決定的で最終のメッセージ

ヨハネの福音書と同じ著者による黙示録19：13の中で、ヨハネはイエスの壮麗な再臨について記述しています。「彼は血で染まった外衣を着ています。また、彼が呼ばれる名は『神のことば』です。」この地上へ戻るとき、イエスは『神のことば』と呼ばれるのです。2節あとでヨハネは「彼の口から、鋭い剣が現れます。（黙示録19：15）」言いかえれば、イエスは彼が話す『神のことば』すなわち御霊の剣（エペソ6:17）の力で国々を打ちます。しかし、この『ことば』の力はイエス御自身と非常に深いつながりがあるので、ただ単に彼の口から出て来る『神のことば』という剣を持っているだけではなく、イエスこそが『神のことば』なのです、とヨハネは言っているのです。

つまりヨハネは彼の福音書を書き始めるにあたり、彼はすべての黙示、すべての真実、すべての証言、すべての栄光、すべての光、そしてイエスの生き方、教え、死にざま、昇天にいたるまでの間にイエスの口からでてきたことばのすべてを思い巡らしていたのです。そしてその神の黙示のすべてを『ことば』として要約するのです。その『ことば』は、はじめでありおわりである、究極の、決定的な、絶対的に真実で信頼できる『ことば』なのです。その意味はヘブル書1:1~2と同じです。「はるか昔は、何度となく多くの状況で神は私たちの祖先に預言者を通して話しかけてくださった。しかしこの終わりのときには、神の子を通して話しかけてくださる。」受肉した神の子は神からこの地上へのクライマックス、および決定的な『ことば』なのです。

イエスについての4つの観察

では一体、その行いとことばがこの福音書のページを満たすほどのこの人、イエス・キリストに関して、ヨハネは私たちにまず最初に何を伝えたいのでしょうか？ 彼はイエス・キリストに関して私たちに次の4つのことを伝えたいのです。1) 彼の存在のはじまり、2) 彼の同一性の本質、3) 神との関係、および、4) 世界との関係。

1) 彼の存在のはじまり

1節: 「はじめにことばがありました。」ここで使われているギリシャ語の「はじめ」という単語は、ギリシア語で書かれている旧約聖書の最初の2つの単語と同一です。「はじめに、神は天と地を創造した。」これは偶然ではありません。なぜなら、イエスが行ったことのうち、ヨハネがまず私たちに伝えようとしていることは、イエスがこの世界を創造されたということだからです。それは3節（創世記1:3）に書かれています。よって、この「はじめに」という言葉は、いかなる物質が創造される前に、『ことば』である神の子が存在していた、ということの意味をしています。

「イエスがキリスト、すなわち神の子であるとあなたが信じるように、これらのことは書かれているのです。（ヨハネ20：31）」と言うのを覚えておいてください。ヨハネはイエス、すなわちキリストであり神の子が歴史的にどこに現れるのか（つまりは歴史が始まる以前から存在した）ということからこの福音書を始めるのです。ユダの手紙の著者ユダはその偉大な頌栄の真実に大喜びします。「唯一の神、私たちの救い主に、栄光、威厳、主権、および権威が、私たちの主であるイエス・キリストによって、世の始まる前から、今も、とこしえにあるように。アーメン（ユダ1：25）」パウロは第2テモテ1：9で、「永遠の時の前に」キリスト・イエスにより私たちに恵みを与えてくださったと言っています。したがって、どんな時間あるいはどんな物質が存在する前に、『ことば』すなわち神の子であるイエス・キリストが存在していたのです。それこそ、私たちがこの福音書で出会う方なのです。

2) イエスの神との同一性の本質

1章1節は「その『ことば』は神でした。」と終わります。この福音書の特徴のひとつは、最も重きのある教えがしばしば最も簡単な単語を用いて伝えられることにあります。ここに書かれてあるよりも簡単には伝えられないと同時に、これより重きのある教えもあります。イエス・キリスト、肉体をとられ私たちの中に住まれた『ことば』は神であられたし、今でも神なのです。

この事実をベツレヘム教会において、いいえ、まことのキリスト教教会すべてにおいて、はっきりと明確に知らされるようにしましょう。イエスの前に倒れ伏したトマス（ヨハネ20：28）と共に、喜びと驚異にあふれ「わが主、わが神」と告白しましょう。

「私たちは、よい行いのためにあなたを石打ちにするのではなく、神への冒瀆によるのです。なぜなら、あなたは人でありながら自分を神としたからです。（ヨハネ10：33）」とユダヤ人の指導者たちが言ったのを聞くときに、私たちは「それは違います。イエスは神を冒瀆していません。なぜなら、この方こそわが救い主、わが主、わが神なのですから。」と叫ぶのです。

このヨハネの福音書の連載説教にどのような意味があるかわかりますか？何週にもかけてイエスを知ることによって、私たちは神を知ることになるのです。神様を知りたいですか？そうなら、是非一緒に、他の人も誘って教会に来てください。イエスに出会い、同時に神様にも出会ってください。

もし、エホバの証人（ものみの塔）やイスラム教徒の人が「これは誤訳です。本当は『ことばは神 [the God]

であった。』と書かれてはいないのです。実際には『ことばは神 [a god] であった。』と書かれ

ているのです。」(訳者より：The Godは唯一の神であるのに対し、a god は多神教の神、あるいは「神のような存在」ととれる。) この言い分が間違っていることは、たとえあなたがギリシャ語を理解しなくても文面から知ることができます。それは今日の最後のほうで説明します。ですが、まずこのイエスと神との関係を見てみましょう。

3) 神とイエスの関係

一節の中間に「その『ことば』は神とともにありました。」と書かれています。「初めにことばがあり、そのことばは神とともにありました。そしてそのことばは神でした。」これは三位一体の偉大な歴史的教理の中心です。そのうちに、私はヨハネの福音書のここ以外と他の聖書の箇所から、この教理だけに関する説教をするかもしれません。

ですが今日のところは、この単刀直入な文章を、あなたの頭にしっかりと入れてもらい、あなたの心の奥深くに沈むようにしていただきたいのです。『ことば』であるイエス・キリストは神とともにあり、神であられました。この方は神であると同時に、神との関係を持たれていたのです。神であり、神の姿をしていて、神の性質をすべて完全に反映させ、人の形をとりながら、満ち溢れるばかりの神性をもつがゆえに永遠に臨在しているのです。一つの神の本質に三つの人格、三つの意識があるのです。そのうちの二つはここで挙げられました。父と子です。この本書の後のほうでこの名前に関して学びます。聖霊はのちほど紹介します。

くすんだ鏡でぼんやりと見るように、そしてそれも部分的にしか見えてはいないので(第一コリント13:9, 12)、今学ぼうとしていることが謎のまま終わることに驚かないでください。そして、それでも諦めないでください。もしイエス・キリストが神でないなら、この方はあなたの救いを達成できなかったのです(ヘブル2:14~15)。また、その栄光は、美の新しい発見に対するあなたの永続的な切望を満たすには十分ではありませんでした。もしあなたがイエス・キリストの神性を捨てるのなら、それはあなたの魂を、そしてそれとともに未来永劫の喜びを捨てることになるのです。

では最後に、この世との関係を見てみたいと思います。

4) 世界との関係

2~3節 「この方は神とともにはじめからおられました。すべてのものはこの方を通して創造され、この方なしに造られたものは何一つありませんでした。」

肉体をとられ、私たちの間に住まわれ、教えられ、癒され、お叱りになられ、守ってくださり、私たちを愛され、そして私たちのために死なれた『ことば』がこの世界を造られたのです。1節の三位一体の謎を心にとめておいてください。3節を読んだ途端に忘れないでください。「すべてのものはこの方を通して創造されました。」そうなのです、だれか他の方がこの方を「通して」行っていたのです。それは神でした。でも『ことば(この方)』も神なのです。ここの節から、キリストが創造主として行われた壮大さをあなた自身の中で減少させないでください。この方はすべてのものが創造されたときの、父なる神の右腕、すなわち『ことば』だったのです。ですが、その行いにおいても、この方も神なのです。『ことば』である神がこの世界を造られたのです。あなたの救世者、あなたの主、あなたの友、イエスはあなたの造り主なのです。

被造物でないイエス

さて、仮にイスラム教あるいはエホバの証人、あるいは、アリウス主義(4世紀に生れた古い異教の一つ)の宗派の人が「イエスは神ではない。永遠に存在している者ではなく、はじめに造られたのだ。一番最初の被造物。いと高き天使の中の最高の位の天使である。」と言ったと仮定してください。あるいは、アリウス派の人が言ったように「彼(イエス)が存在しない時があった。」としてもかまいません。ヨハネはそんな考えを全面否定するために1章3節をあのように的確に書いたのです。

ヨハネはただ単に「すべてのものはこの方を通して創造されました。」と言ったのではありません。それはそれだけで問題解決に十分であると思うかもしれませんが。この方は被造物ではありません。この方が被造物を造られました。しかし、誰かが次のように言うことは可能です。「『すべてのもの』はイエス自身を含んでいない。つまり、イエスは神によって創造され、その後、父とともに他のすべてのものを造られた。」

ですが、ヨハネはそこで終わらせてはいないのです。3節の終わりに「この方なしに造られたものは何一つありませんでした。」と付け足して書いています。ここの「造られたもの」とは、残りの「この方なしに... 何一つありませんでした。」にどのような意味を与えているでしょう。それはこういうことです。造られたものという分類のなかにある全てのものはキリストが造られた、ということを確認を持って、強調して、明白にしているのです。ですから、キリストは造られませんでした。なぜなら、存在前に自分を存在させることなど出来ないからです。

キリストは造られたのではありません。神であるというのはそういうことです。そして、その『ことば』は神だったのです。

私たちがその方の栄光を仰ぎ見、あがめたたえることができるように、主が助けてくれますように。アーメン。

翻訳 愛咲えみ